

造艦技術向上策に就て

昭和 10 年秋

海軍造船少佐	牧野 茂
海軍造船大尉	松本喜太郎

(昭和 39-9-1、 技術少佐 福井 静夫 転写)  
(平成 30-3-23、 元海将補 岩崎 洋一 再転写)  
(表紙とも 5 枚)

ここに紹介するのは、「友鶴事件」及び「第四艦隊事件」の発生直後の昭和10年秋に、帝国海軍の若手造船官（牧野少佐、松本大尉）が上程した造船技術者の教育方針に対する提言書である。

戦後の昭和39年に福井静夫氏がこの提言書を手書きで転写し残されていたが、紙面の老朽化とともに年々読み取り難くなっていることから、今回これを再度、電子清書した。

3ページ目に福井氏が記しているように、この提言は海軍の若年造船官が当時の艦本第4部長（造船官のトップ）に自発的に提出した意見書であり、帝国海軍80年の歴史の中でも異例のことであったという。

提言内容は、①造船技術の方針の明示、②中堅造船官への課題答申、③造船官の戦略、戦術眼の涵養、の3つである。

日米開戦も間近と予想される中での、少壮造船官の切迫感・焦燥感が感じ取られる内容となっている。②や③については、現在の装備幹部教育の中で一部考慮されているところであると認識するものの、その実態については牧野、松本氏が思い描いていたものと同じであるかどうかは、心もとない気もする。（課題答申は真にその装備幹部の専門分野のテーマを扱ったものとしているか、幹部学校教育は真に現代海上戦闘・戦術を扱ったカリキュラムとなっているか、など）

愚見はさておき、福井氏転写の一文をそのまま清書したものをご紹介します。読者の考察の一助とされたい。

2018.3.23

岩崎 洋一

## 来歴

本意見書は昭和9年3月の友鶴転覆事故につづいて、昭和10年9月、第4艦隊事故（初雪、夕霧の船体切断を主とする船体構造及強度の問題）を生じ、わが海軍造船技術に関し、致命かつ根本的な欠陥が暴露せられし直後、艦本第4部における少壮造船官として、軍艦設計に最も将来を嘱望されありし牧野、松本両氏が、わが海軍の前途を憂うのあまり、相論じ相はかりて、起草し、上司たる艦本第4部長山本幹之助造船中将に自発提出したる意見書なり。かかることは帝国海軍80年史を通じ異例なり。

なお、牧野造船少佐（当時）は当時駆逐艦設計班長、松本造船大尉は基本計画班員として戦艦大和型の計画中心なり。

牧野氏は第4艦隊事件当時、大演習審判部員なりき。

参考：艦本第4部長（海軍造船の最高責任者）

造船中将 山本 幹之助（最初、兵学校へ入学し、のち高技へ転じ造船に進む）

艦本第4部基本計画主任

造船大佐 福田 啓二 （45歳）

同 首席部員

造船大佐 村上 義次 （46歳）

本稿作製者の年齢（当時）

牧野造船少佐 34歳

松本造船大尉 33歳

（福井 記）

## 造艦技術向上策に就て

帝国海軍の造艦技術が過去のある時代に各国海軍をリードしおりあるは事実なり。されど技術は日進月歩す。彼等の拂（はら）う十の努力に対し、我常に十以上の努力を以て之に対抗しおらずんば彼におくるべし。軍艦の良否は其俣（そのまま）戦略戦術良否の一面となる。帝国の国情に鑑み常にその造艦技術が世界各国をリードする要あるは明かなり。

翻って現状を正視し将来を案ずるに、現状を維持して果して吾人造船官がその重責を全うし得るやを恐る。敢（あえ）て自己の不識をも顧ず本文を草し、帝国海軍造艦技術向上具体策に関し率直に所見を開陳する所以なり。本文が単に我等の杞憂にすぎずして、不明不見識を示す資料となり終らば望外の幸いなり。

国家が最も優秀なる造艦技術を常に確保せんが為には、絶えず最優秀なる実力を有する技術者を有せざるべからず。然るに其の如き技術者は一朝一夕にて養成さるべきものに非ずして、よき指導と自身不断の苦心努力との結果に他ならず。

或（あるい）は言はん、最優秀なる技術者はその天才的個性に加うるに独自の熱烈なる研鑽と長き経験に基く信念の賜にして、全く自発的の成果に俟（ま）つべしと。然（しか）り、其の如き技術者の出現を望むや切なるも、期待に反してかかる技術者の自然的出現なき場合は如何。

此に於て国家はかくの如き技術者を養成し、常に次から次へと供給し得る如き組織を講ずる要あり。

今日の造船官は広汎なる造艦學術の真髓を把握するのみにても容易に非ず。然も百尺竿頭（ひやくしゃくかんとう）更に一步を進むるの重大責任を擔う（担う）べきを思うとき、少壯造船官の指導と少数優秀造艦技術者を養成すべき方策を確立すべき必要量、豈（あに）昔日の比ならんや。

今日艦本4部及各造船部課に在りて此点に関し、如何なる方策を樹立せられるや。実状甚（はなは）だ寒心に堪えざるものあり。我等の抱懷（ほうかい）する具体的方策次の如し。

### 1 造艦技術向上のため必要とする造船官各自の努力の方向に関する指導方針の明示

最近数年の実状は之を極言せば、漫然時流に投じて大衆が無方針に一方向に向い、或は方向転換をなし居たるに過ぎざるに非ざるや。たとえば緊縮時代に於ける管理法への大衆的流れはつづいて電気溶接への盲目的方向転換となり此の間に費されたる多大の努力にも不拘、その効果の適切ならざりし原因に就ては当時の指導精神に思い及ぶとき

当然の帰結と認めらるべく、他方造艦技術上最も大切なる防御等に関する方面は必然著しく疎外せられたる感なき能はず。

凡（およ）そ造艦技術全般に涉（わた）る重大なる動向は造艦技術発達の根本義（こんぽんぎ）より発して常に明確に指示せらるべきものと信ず。

## 2 少壮造船官訓育指導制度の樹立

前項により造艦一般の努力の指向すべき所を明示せられたる上は、その成果を要約交換して技術向上の一大刺激たらしむるため少佐及同相当官以下の少壮造船官全部に対し各（おのおの）の配置を考慮し、毎年2回、計画、研究、又は工作上の問題につき課題を与へ、期限を付して答案を提出せしむるを可と認む。

答案の査閲講評は部課長之を行い第4部長は全答案を一括製本し複写して各造船官に閲覽せしむ。

其の如き答案集は常に各造船官の能力、適性及努力の程度等を確認するの有力なる資料たるのみならず、造艦技術年鑑ともなりて全体的指向指示の反映を知り、更に将来への対策樹立を容易ならしむ。更に強度、性能、防御等に関するエキスパートの指導教育にも利用し得。

かくして始めて全造船官を以てする完全円満なる造艦技術の向上を期待し得るものと信ず。

課題を例示せば、駆逐艦担当者に対しては、

「帝国海軍駆逐艦の将来における諸性能について」

の如く、又船殻工場勤務者に対しては、

「溶接、鋸接混用構造に対する注意点」

等の如し。

## 3 海軍大学校の聴講

艦本第4部勤務の計画方面担当造船官には必ず海軍大学校の戦史、戦略、戦術方面の講義のみを聴講せしめ計画上の一般常識を是非共涵養せしむの要ありを認む。

軍令部よりの要求に就て説明を与えられざる今日、如何に有能なる計画者と雖（いえど）も要求の根本精神に対する適切なる批判力なくんば計画の完璧は到底望み得べからず。よき造艦計画者は優れたる総合技術者たると同時に、戦略、戦術的艦艇取扱法に就ても一見識を有せざるべからず。

(終)